

受賞後の和牛繁殖 原澤牧場

東京農業大学 名誉教授 新井 肇

1. はじめに

群馬県下で和牛の繁殖経営を営む原澤典雄さんは、平成 16 年度全国畜産経営管理技術発表会で優秀賞（生産局長賞・中畜会長賞）を受賞した。県の審査会では、「和牛繁殖農家は比較的土地基盤の希薄な経営が多いが、当農場は夏山・冬里方式によって得られた労働力を積極的な借地で自給飼料生産を行っており、高く評価できる。また、夏山・冬里方式により環境問題の発生頻度が高い夏期にほぼ無畜状態にできることから、十分な対策が実践できている。さらに、夏期預託によって得られた労働力を野菜との複合経営に発展させた」こと等が評価された。要するに県下の育成牧場をフルに活用することによって、粗飼料不足を緩和し、ふん尿処理負担を軽減し、労働力を浮かせて他作目を導入し、和牛繁殖を軸とする複合経営を構築したことが、評価され注目されたのである。受賞後、わずか 3 年であるが、早くも変化が見られる。審査で評価された点を中心に、その後の経営展開を見てみたい。

2. 経営概況—経営規模、作目の変化

原澤牧場の所在する旧新治村はその後、合併して利根郡みなかみ町に所属している。ここは上越新幹線上毛高原駅や高速の IC から 6km、自宅前を国道 17 号線が走るという交通至便な場所にあるが、旧村の 84 %が山林原野という山村でもある。

主要作目は畜産、水稲、果樹で、畜産は酪農、肉牛が主で、肉牛は繁殖地帯で 38 戸が成めす牛約 400 頭を飼養し、飼養頭数は最近においても減少していない。近年、酪農の廃業者で和牛飼育に入る人がある。

原澤牧場の肉牛飼育は原澤さんが就農した昭和 42 年の肥育牛 1 頭から始まり、40 年を経た今日、成雌牛 84 頭の繁殖専門経営に成長している。その間、肥育→一貫→肥育→一貫→繁殖と、曲折を経てきたが、昭和 60 年頃から計画的に自家繁殖によって雌牛の質と頭数を揃えるようになった。平成 9 年には肥育を中止し、繁殖雌牛 50 頭規模となり、受賞後はさらに規模拡大して 80 頭体制に入りつつある（表 1）。これで完成したというわけではないが、今後は質的改善はするが、頭数規模がこの水準を維持していきたいとしている。

原澤牧場の経営規模、栽培面積を見ると、受賞の前後で若干の変化があった。経営の柱である繁殖成雌牛の頭数は 64 頭から 84 頭へ増加し、畜舎も 200 m²の増築が行われていた（表 2）。

経営土地面積は変わらないが枝豆と水稲が減少し、飼料作物（コーン）が増加し、飼料基盤が強化されている（表 3）。枝豆は受賞時 140a、最盛時には 200a も作付けされている

だが現在は 60a に減少し、今後さらに減らしていくとしている。理由は収穫後のもぎ取り、選別、袋詰め作業に多大な労力がかかることである。複合性は減退するが、浮いた労力を和牛へ仕向けることで収益性は増加するものと思われる。

表 1 原澤牧場の経営の推移

年次	頭数規模	内 容
昭和	肥育 1 頭	就農する。高山から導入。
42	繁殖 3、肥育 1	繁殖導入。
43	繁殖 3、肥育 5	肥育素牛 4 頭導入。
45		繁殖やめる。
51	肥育 40	
60		繁殖 2 頭自家保留。以降毎年繁殖 2 頭づつ増頭。
平成 4	繁殖 30、肥育 60	
7	繁殖 40、肥育 50	渋川市場に初出荷、子牛 29 頭販売。
9	繁殖 50	平成 9 年には繁殖肥育やめる。
10	繁殖 50	渋川市場に子牛 37 頭販売。
11	繁殖 50	渋川市場に子牛 36 頭販売。
12	繁殖 50	肥育牛全頭出荷。
14	繁殖 70	渋川市場に子牛 47 頭販売。
15	繁殖 64	渋川市場に子牛 62 頭販売。
16	繁殖 74	渋川市場に子牛 69 頭販売。
19	繁殖 87	うち 20 頭初妊牛。

表 2 受賞前後の頭数規模の変化 (頭)

牛の種類	平成 15 年	平成 16 年	平成 19 年	摘 要
成 牛	64	74	* 87	*初妊牛 20 を含む
育成牛	13	3	4	
子 牛	56	65	65	

表 3 経営面積、作付面積の変化

	経営面積(a)		作付面積 (a)	
		うち借地	平成 15 年	平成 19 年
水 田	82	26	水稻 82	水稻 50 粗飼料 32
畑	440	300	コーン 300 (裏)イライソ 80 枝豆 140	コーン 350 枝豆 60
山 林	570			

3. 育成牧場の利用を強化

この牧場の特長は、地元には散在する公共育成牧場を活用して、夏山冬里方式で、とくに夏期の飼育管理労働を大幅に軽減してきたことである。受賞後、頭数は増加したがこの方

式をさらに拡充したため、枝豆の減反もあって、農業労働負担は増加していない。

現在の預託先は川場村をメインに県内 4 ヶ所である。基本は夏山冬里（4 月下旬～ 11 月下旬の間で、牧場により下牧時に 1 ヶ月の差がある）であるが、19 年度から川場村の酪農家で冬季も引き続き預かってくれることになり、今年は 14 頭を預託している。これは廃業した酪農家で、空牛舎を利用した舎飼である。川場村牧場の預託料は夏期 400 円、冬期はその 100 円高（高山村はそれより各 100 円安）となる。

4 ヶ所中 3 ヶ所の牧場では、預託中に授精もしてくれる。牧場で放牧中に自然分娩もさせてくれる。単なる子牛の育成預託ではないので飼育者の負担が大いに緩和される。授精をするようになってから預託希望者が増加したという。原澤さんによると「夏は牛舎が空っぽになる」。ふん尿の排出量もそれだけ少なくなるわけで、処理負担が軽減され、規模拡大の阻害要因が少なくなる。

育成牧場はどこも地元の預託者が少なく利用率が低下している。旧新治村は村外の牧場を利用しての預託が盛んで、中でも原澤牧場は旧村の年間 200～230 頭の預託頭数のうち 80 頭を占め、預託の筆頭になっている。ただし、授精を依頼するときも指定した精液を付けてもらうようにし、繁殖農家としての主体性を維持している。

4. 粗飼料生産も外部委託へ

粗飼料の獲得方法には大きな変化があった。粗飼料の栽培面積を増加させる一方、最近では収穫後作業の外部委託を強化し、飼料イネ WCS の購入を増やすなど、外部への依存度を一層高めている。

まずコーンは平成 18 年からロールベールに切り替えた。これによってサイレージの質が均等化し、貯蔵中の変質によるロスがほとんどなくなった。また取り出し、運搬、給与の作業工程がラクになり、全体として省力化された。ロールベール化は作業の外部委託と一体のものである。すなわち収穫作業とロールベール調整作業をすべてコントラクター（県農業公社に委託し、作業は 5 社の土建業者が行う）に依頼するようになった。料金は 10a 当たり 27,000 円＋収量加算で、19 年度の実績は 27,516 円であった。10a 当たり平均 12 ロール（1 ロール 300kg）の収穫があった。

受賞後、飼料イネ WCS の購入を開始し、平成 17 年の 200 個（1 個 200kg）から始まって 18 年 500 個、19 年 600 個と増やしている。購入先は県内の I 町で、価格は運賃込み 1 個 2,500 円。生産量は 10a 当たり 10 個とすると、19 年度は 6ha 分購入したことになる。

5. 新規事業—受精卵の生産と販売

事業量としてはまだ小さいが、平成 16 年から ET により採卵した受精卵を販売するようになった。ドナー牛は 2 頭で、2 回の採卵で 14 卵を採取し、1 卵平均 5 万円として約 70 万円の粗収入を得た。経費差引後の収益性は未だ高くはないが、ドナー牛は当然育種価の高い牛から選ばれるので、繁殖牛の資質向上を必要とする。改良と結びつくことでこの事

業の意義は小さくない。

原澤牧場の課題のひとつに繁殖雌牛の改良がある。平成 18 年の子牛出荷成績は、62 頭で 3,455 万円、これは 1 頭平均 55.7 万円になる。同年の全国平均は 47 万円、渋川市場のそれは 50 万円であるから、平均値よりは高く売れたことになるが、雌と雄の価格差が 12 万円くらいあり、雌が高く売れないことが悩みとなっている。当県は有名種雄牛がいないためどうしても雌牛の価格が出ないという悩みがあるが、原澤さんは産地のせいではなく、雌牛の育成技術を改善する必要があると考えている。それには血統の改良と育成技術を改善が必要で、市場で見られがちな個体のばらつきを少なくして行きたいとしている。

原澤さんの繁殖技術は、受賞後、引き続き改善されている。受賞時の日齢体重（去勢牛）1.13 はクリアされ、分娩間隔は当時の 12.3 ヶ月からで 12.0 ヶ月弱となり、1 年 1 産は確実に実現している。そのため委託先の牧場で生まれた子牛も 10 日目には親子を分離して引き揚げて来るといふ。

受賞後も、現在も変わらず無借金経営であり、運転資金も発生日の翌々日には遅滞なく決済している。

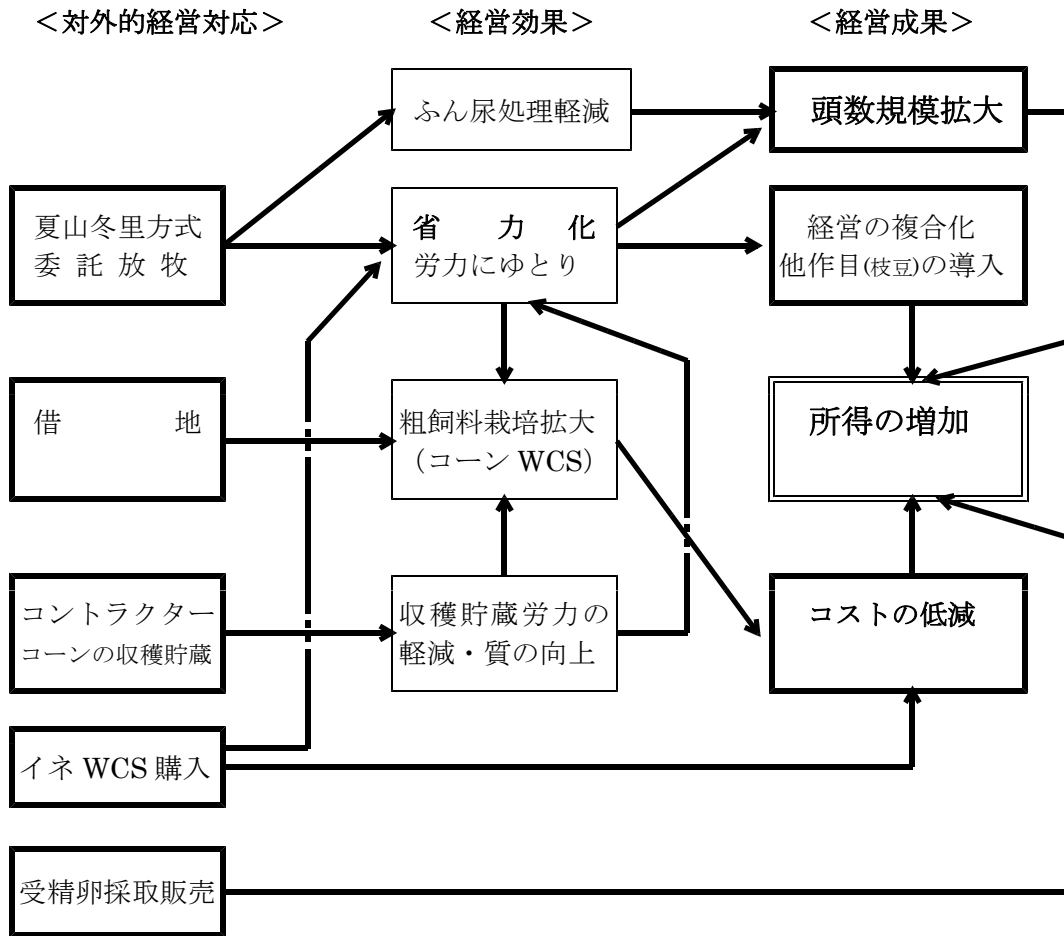
6. まとめ

原澤牧場の特長は、外部の経営支援組織を広く活用し、労力にゆとりのある効率的な経営を構築していることである。また借地や粗飼料の購入によって外部資源を上手く採り入れ、規模拡大へ結びつけていることである。

それをまとめると、次のようになる（図 1）。すなわち、牛の委託放牧、粗飼料の収穫・調整のコントラ利用や、借地を利用した粗飼料生産、飼料イネ WCS の購入がさまざまな効果をもたらしている。第 1 に省力化、第 2 に土地不足のカバー、第 3 に糞尿処理負担の軽減である。もちろん外部委託は、それぞれ一定の費用がかかる。それを自まかないした場合との経済性比較は厳密には行われていないが、経営主は委託した方が「安い」と判断しているようで「非常に助かった」としている。一般に、外部委託は料金次第で不採算ともなりうるが、この経営の場合は、それが他作目（枝豆）の導入による経営の複合化に結びついたり、頭数規模の拡大に結びつくといった間接的効果があり、計算しにくい。それらの成果を総合的に判断すると、外部化出来るものは外部化して、牛の改良や繁殖成績の追求といった経営主の独壇場に精力を集中した方がよいとの判断であろう。ただし、外部化することでまかせきりになることはマイナスをもたらす危険があるが、原澤さんは委託牛に対しても受精時の精液の指定、子牛の早期離乳（10 日で下牧させる）等、自分のペースを守っており、主体性を持って利活用しているのである。

原澤牧場の歴史を見ると、規模拡大を一貫して追求してきているがそのテンポは着実で、

図1 受賞後の新たな経営対応と経営成果



財務バランスを崩すような冒険はしていない。また零細肥育で始まり、今日の繁殖専門多頭経営を完成するまでの40年間ににしばしば繁殖と肥育の組み合わせを変えてきている。状況変化に対応した弾力的な経営判断によるものと評価したい。そういう経営感覚から、今後は規模拡大よりも牛の改良、子牛資質の向上の専念したいとしているようである。その先の展望については本人は語らなかったが、後継者がUターンしてくるかどうかにかかっているように感じられた。



増築した牛舎。連動スタン
ションが付いた手前半分が増
築部分。



おが屑を敷いた牛舎の内部。



経営主の原澤典雄さん。